宮古のグスク時代における建物跡の様相

久貝弥嗣

はじめに

11～12 世紀を境に、宮古・八重山諸島と沖縄諸島とは、同一文化圏を形成するようになる。これは、前代の無土器期において異なる文化圏に属していた宮古・八重山諸島にとって大きな文化的画期であったといえる。この同一文化圏を形成するにいたった根拠は、11～12 世紀の沖縄県内の遺跡から共通して出土する滑石製石鍋、カムィヤキ、白磁玉縁碗である。この点については、出土量に違いはあるものの、宮古・八重山諸島から出土している。しかし、その後のグスク時代の展開については、出土遺物の点から沖縄諸島と宮古・八重山諸島とでは相違点がみられることが指摘されており、15 世紀の中頃までは、沖縄諸島のグスク時代の遺跡とは異なる地域的な特色有していたことが指摘されている(久貝 2014)。このようなグスク時代の地域性の検討の中心は、中国産陶磁器と土器にあったといえる。本論では、従来の遺物研究に加え、生活様相を示す遺構として、宮古のグスク時代の建物跡に焦点をあててみたい。そこで、事例は限られてくるものの、宮古のグスク時代の建物跡について集成を行い、それを建物の形態などの属性で細分類を行い、遺構内や柱穴内出土遺物によって年代観を示していきたい。なお、沖縄県内のグスク時代の建物跡については、宮城弘樹氏(2006, 2007)によって整理されている。これらの先行研究などをもとに沖縄諸島や八重山諸島の事例と比較を行うことで、宮古のグスク時代の建物跡の特徴を抽出していきたいと考える。

なお、柱穴によって構成される建物跡については、掘立柱建物跡として理解するが、本論内で各遺跡で検出される遺構の名称については、報告書内の遺構名を用いるものとする。

1．住居跡

宮古のグスク時代の住居跡についてまとめていきたい。これまで、宮古のグスク時代の住居跡が検出されている遺跡は、宮国元島、住屋遺跡(俗称・尻間)、住屋遺跡(1981, 1999)、尻川遺跡、新里元島上方台地遺跡である。この中で特筆すべきは、住屋遺跡(俗称・尻間)において、15 世紀中頃をさかいにして竪穴住居から掘立柱建物跡へ変遷する過程が報告されている点にある。このような変遷は、尻川遺跡においても確認されていることから、現在の市街地一帯に限定されるものの宮古の住居形態の変遷の傾向を示している。以下、各住居跡について具体的にみていきたい。

(1)宮国元島遺跡

宮国元島遺跡では、宮古で初めてのグスク時代の竪穴住居が検出されている。竪穴住居は、第15地区で検出されており、平面形態は隅丸の長方形型を呈し、竪穴内部には4カ所の落ち込みが報告されている。竪穴の周辺部及び内部からの柱穴は確認されていないが、竪穴中央部には、礎石と考えられる丸い珊瑚石灰岩が検出されている。出土遺物は少ないようであるが、青磁の出土状況から15世紀頃と報告されている。

なお、本論で扱うグスク時代の対象外ではあるが、17世紀の掘立柱建物跡も第15地区と第16地区より各1基ずつ検出されている。

(2)住屋遺跡(俗称・尻間)

住屋遺跡(俗称・尻間)においては、2基の竪穴住居と3基の平地式住居が報告されている。2基の竪穴住居は、出土遺物から概ね14世紀から15世紀前半頃に位置づけられている。2基の竪穴住居を比較してみると、いくつか相違点がみられる。まず、竪穴住居に伴う柱穴の位置である。第1号竪穴住居が、竪穴の上場の縁沿いに柱穴をもつのに対し、第2号竪穴住居は、竪穴の下端に柱穴が位置している。これには、第1号竪穴住居と第2号竪穴住居の構造的な違いが考えられる。第2号竪穴住居では、上場縁沿いに琉球石灰岩が検出されていることから、竪穴の上場縁沿いを石積みで囲っていた可能性をもっている。一方、第1号竪穴住居からはこのような石灰岩礫は検出されていない。このことから2つの竪穴住居には、構造的な違いが認められる。もう1点は、2基の竪穴住居の平面プランの違いがあげられる。第2号竪穴住居は全面検出されていないことから、第1号竪穴住居との比較には限界があるものの、第1号竪穴住居が隅丸長方形の平面形態をもつのに対し、第2号竪穴住居は円形に近い平面形態が想定される。このような平面形態や構造的な違いをもった竪穴住居が住屋遺跡(俗称・尻間)より検出されている。

(3) 住屋遺跡(1981)

1981年2月19日～3月21日の期間で実施された第2次緊急発掘調査の中で2基の竪穴住居跡が報告されている。

(4)住屋遺跡(1999)

住屋遺跡(1991)では、竪穴住居が1基、掘立柱建物跡が5基報告されている。竪穴住居の平面形態は、隅丸の長方形型を呈し、竪穴の上場縁沿いに8～10個の柱穴が巡らされている。

また、竪穴内からは炉跡も検出され、階段状の遺構も確認されている。このような竪穴の形態は、住屋遺跡(俗称・尻間)の第1号竪穴住居と類似している。この竪穴住居からは、14世紀代の白磁、中国産褐釉陶器の出土が報告されている。

一方、平地式住居について報告書内の文章で報告されているものとして、平地住居跡Aと平地住居跡Bがあり、平地住居跡Bは2基の掘立柱建物跡をまとめていることから、計3基の掘立柱建物跡となる。しかし、それ以外にも遺構図の中でプランが示されている掘立柱建物跡が3基みられる。これらについては、本論内で、平地住居跡仮C～Eとして扱う。

平地住居跡Bは、中央に1本の中柱を含む9本の柱穴からなる長方形型の掘立柱建物跡と、中柱をもたない9本の柱からなる方形型の掘立柱建物跡の2基の総称である。柱穴の切り合い関係から方形型が長方形型に先行していることが報告されている。平地住居跡仮C・Dは、9本の柱からなる方形型で、平地住居跡仮Eは、6本柱の長方形型の掘立柱建物跡である。この中で、9本柱の方形型は、ほぼ共通した規格で構成されていることから、一つの建物跡群として捉えることができると考える。また、中柱を含む9本柱の長方形型と、6本柱建物跡は、形態的な違いがあるが、同一の方角に軸をもつ点では共通している。これらの掘立柱建物跡の年代については報告書内で触れられてはいない。

(5)尻川遺跡

住屋遺跡(俗称・尻間)にみられるような竪穴住居から掘立柱建物跡へと住居形態が変遷する事例は、尻川遺跡でも報告されている。尻川遺跡においては、第4層と第3層という2つの生活面で遺構が検出されている。第4層では、竪穴住居跡が1基検出されている。平面形態は、円形をなしており、掘りこみの斜面地に楔石と想定される石灰岩礫や柱穴が検出されていることから、住屋遺跡(俗称・尻間)の竪穴住居とは形態的に異なることが指摘されている。竪穴住居内からは、野城式土器が僅かに出土するのみであるが、報告書内では、住屋遺跡(俗称・尻間)の事例を参考に、14世紀から15世紀前半の可能性を想定している。

4層よりも上層の3層の段階では、3基の掘立柱建物跡が検出されている。平地建物跡①と②は、いずれも長方形のプランで、もう1基は円形のプランで構成されている。平地建物跡①・②とする長方形の掘立柱建物跡は、柱穴の数が判然としないものの、共通の規格性をもって構成されている。また、平地建物跡②は、建物内に炉跡が検出されている。この平地建物跡②と切り合う形で円形建物跡が検出されている。円形建物跡は、周囲を約1m間隔で集石や柱穴が配置されている。このような円形の建物跡が検出される事例は県内でも稀である。

(6) ミヌズマ遺跡

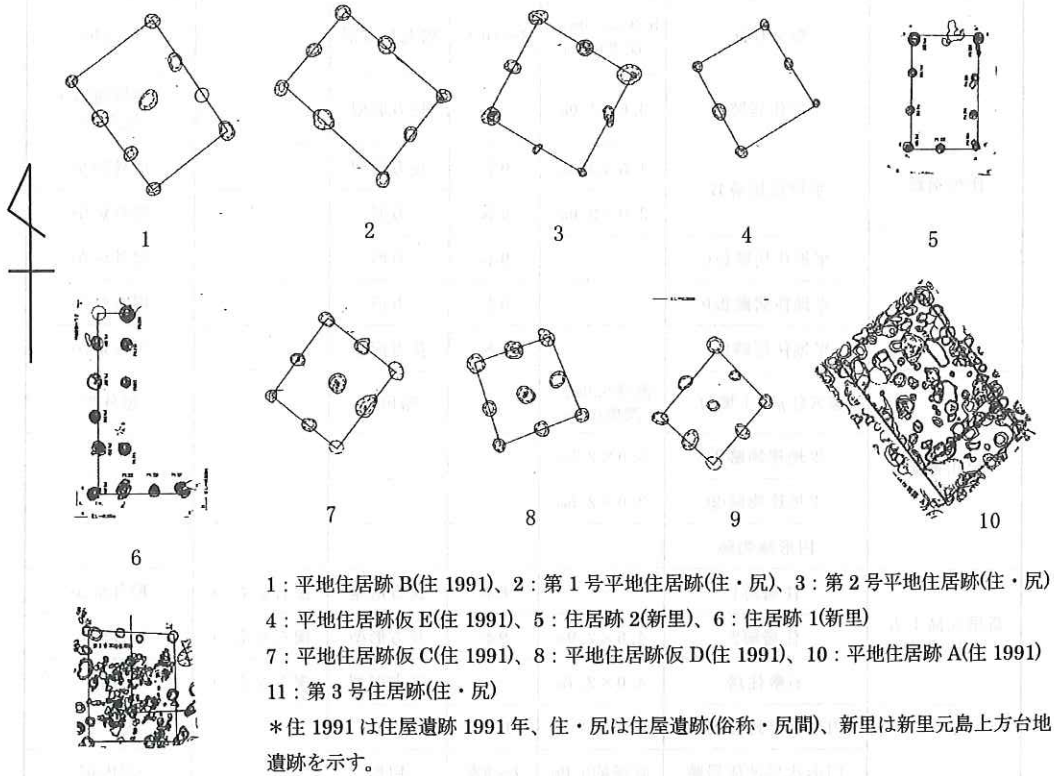
平成 24・25 年度に発掘調査が行われたミヌズマ遺跡では、従来の調査報告にない新たな知見がえられている。これらの調査結果については、現在整理段階にあるが、参照事例として建物跡や出土遺物の概要についてまとめていきたい。

平成 24 年度の発掘調査では、10 基以上の掘立柱建物跡と、4 基の土壙墓が検出されている。掘立柱建物跡の大きな特徴としては、6 本柱を主体としている点があげられる。6 柱の建物跡は、多少の誤差はあるものの、長辺が 4.0～4.4m、短辺が 2.0～2.2mの規格にまとまってくる。また、建物の軸も北西-南東と規則的である。この傾向は、平成 25 年度の調査でも同様の事例が確認されている。さらに、この 6 本柱の建物跡の柱穴の形態は 2 つに分けられる。1 つは、単純に土を掘り込んで柱を建てたと考えられる柱穴で、もう一つは、柱穴の内部に柱と柱穴の空間を詰めるために石を柱穴の側面に廻らしたり、柱穴の底の部分に石灰岩を複数敷き詰めるもしくは平坦なサンゴ石を配置するなどの柱穴が認められる。検出される掘立柱建物跡としては、石灰岩などを含まない単純な柱穴のタイプが多く、後者のタイプは、2 例のみの確認となった。この掘立柱建物跡の年代観について、年代を推し量る資料が少なく現在検討中である。複数の柱穴内からは、野城式土器、中国産褐釉陶器などが僅かに出土するのみである。現在、野城式土器は、概ね 13 世紀後半～15 世紀頃を主体とする時間軸が設定されているが、13 世紀後半以前から使用されていた可能性も考えられる。この掘立柱建物跡の年代を考える上で、新たなデータが最近えられている。平成 25 年度の調査区域から検出された 6 本柱建物跡の柱穴内からは、白磁玉縁碗、滑石混入土器、カムィヤキの出土する建物跡が 2 基確認されている。また、炭化物が残されていた柱のC14年代測定値が、暦年補正年代で 10～11 世紀を示している点を踏まえると、ミヌズマ遺跡において、グスク時代初期より掘立柱建物跡をもった集落が機能していたことを推察させる。

土壙墓は 4 基確認されている。3 基は、6 本柱建物跡に隣接して検出されているが、3 基はそれぞれ離れた位置から検出されており、土壙墓だけがまとまって検出されているわけではない。土壙内に埋葬された人骨は、いずれも残存状況が非常に悪く、骨が脆くなっている状態であった。埋葬姿勢が確認される人骨はいずれも足を曲げた状態で埋葬されており、土壙内からの遺物の出土は認められない。また、平成 25 年度の調査地においても、6 本柱の建物跡に隣接して土壙墓が検出されている。このことから考えると 1 基その類例に当てはまらないものの、6 本柱の建物跡に隣接して土壙墓が設けられているのは本遺跡の一つの特徴といえる。

出土遺物については、プライマリーな包含層が残されていないため、大部分が、畑の境界

としてつまれた石積みからの表面採集資料である。しかし、当時のゴミ捨て場であったと考えられる土坑も1基確認されているほか、ピット内からの一括出土の事例も複数認められる。これらの出土遺物については、現在遺物整理中であるが、13 世紀後半から 15 世紀前半にかけての資料が主体をなしている。具体的に、もっとも出土量が多いのは、土器と中国産褐釉陶器である。土器は概ね宮古諸島で野城式土器とよばれる2つもしくは4つの耳をもった鍋形の土器であり、中国産褐釉陶器は、中型の壷や洗といった器種が出土している。年代観の明らかにされている資料としては、白磁今帰仁タイプ、ビロースクタイプⅡ・Ⅲ、青磁無文外反碗、弦文帯碗などが主体をなす。しかし、13 世紀後半をさかのぼる資料も出土しており、白磁玉縁碗、白磁口禿碗、青磁劃花文碗、滑石、カムィヤキなども出土している。また、宮古諸島において出土例の少ないものとして、磁州窯産の瓶、大海茶入れといった遺物も出土している。



1：平地住居跡 B(住 1991)、2：第 1 号平地住居跡(住・尻)、3：第 2 号平地住居跡(住・尻)
4：平地住居跡仮 E(住 1991)、5：住居跡 2(新里)、6：住居跡 1(新里)
7：平地住居跡仮 C(住 1991)、8：平地住居跡仮 D(住 1991)、10：平地住居跡 A(住 1991)
11：第 3 号住居跡(住・尻)
＊住 1991 は住屋遺跡 1991 年、住・尻は住屋遺跡(俗称・尻間)、新里は新里元島上方台地遺跡を示す。
＊方位は、全て統一。

第 1 図 宮古のグスク時代の掘立柱建物跡

表1　宮古のグスク時代の建物跡一覧

遺跡名	遺構名	規模	柱の数	形態	柱穴の形態	備考
宮国元島遺跡	竪穴住居(SA01)	3.8×5.8m、深度0.8m		隅丸方形	中央に礎石	
住屋遺跡(1981)	竪穴住居	2.5×5.0m、深度0.7m	ー	隅丸長方形		屋内炉
	竪穴住居	ー	ー	ー	ー	ー
住屋遺跡(俗称・尻間)	第1号竪穴住居跡	5.0×2.0m、深度0.6m	8本	隅丸長方形		屋内炉
	第2号竪穴住居跡	一部検出	(5本)	円形		ー
	第1号平地住居跡	3.0×4.0m	8本	長方形型		屋外炉
	第2号平地住居跡	3.6×3.6m	8本	正方形型	2	屋外炉か
	第3号平地住居跡	3.3×2.9m	8本	正方形型		屋外炉か
住屋遺跡	竪穴住居	5.3×2.0m、深度0.5m	8～10本	隅丸長方形		屋内炉
	平地住居跡A	6.5×4.0m	ー	長方形型		二部屋構造・屋外炉
	平地住居跡B	4.5×3.0m	9本	長方形型		屋外炉か
		3.0×3.0m	9本	方形		屋外炉か
	平地住居跡仮C		9本	方形		屋外炉か
	平地住居跡仮D		9本	方形		屋外炉か
	平地住居跡仮E		6本	長方形型		屋外炉か
尻川遺跡	竪穴住居(土壙3)	直径5.0m、深度0.8m		略円形		屋外炉
	平地建物跡①	3.0×2.5m				
	平地建物跡②	3.0×2.5m				
	円形建物跡					
新里元島上方台地遺跡	住居跡1	ー	6本	長方形型	楔石をもつ	屋外炉か
	住居跡2	4.6×2.9m	9本	長方形型	楔石をもつ	屋外炉か
	石敷住居	4.0×2.7m	ー	長方形型	楔石をもつ	屋内炉
ビロースク遺跡	円形状平地住居跡	直径約3.0m	10本	円形		屋外炉
	円形状平地住居跡	直径約3.0m	7～8本	円形		屋内炉
	台形状掘立柱建物遺構	上底0.8m、下底1.3m、高さ0.7m	4本	台形	楔石をもつ	祭祀的建物か
	長方形平地住居跡	3.0×6.0m	7本	長方形型	楔石をもつ	

2．宮古のグスク時代住居跡の分類と変遷

(1)建物跡の分類

これまで、6つの発掘調査から検出された21のグスク時代の建物跡を整理してきたが、これらを各属性ごとに分類を行ってみたい(ミヌズマ遺跡はのぞく)。

①建物の形態

Ⅰ：竪穴住居；地面を掘りくぼめ、その床面を平らにして床をつくり、その上に屋根をかけた構造をもつ住居(江坂ほか2005年)。

Ⅱ：掘立柱建物；柱を有する建物跡で、柱穴やプランに違いが認められるものの、概ね床もつ平地式の建物

②プラン形態

平面プランの形態に基づいて、以下の4つのタイプに分類する

A：方形　、B：隅丸長方形　、C：円形　、D：不定形

③柱穴の形態

1：単純に柱穴のみをもつもの

2：柱穴内に、楔状の石をめぐらしたり、柱穴の底に礫を敷きるもの

3：礎石をもつもの

④炉跡の有無

炉跡を屋内にもつか、屋外にもつかによって分類する。

a：屋内炉　、b：屋外炉

⑤床面の選択と造成

主に掘立柱建物跡に関係する分類項目であるが、建物床面の造成の点から分類する。

ⅰ：土；土の部分を選択して建物跡を建て、床面部分を造成することなく土で構成されるもの。

ⅱ：石灰岩；琉球石灰岩部分を選択して建物跡を建て、床面が石灰岩で構成されるもの。

ⅲ：礫敷き；土、石灰岩を問わず床面部分に石化岩礫を敷いて床面を造成するもの。

上記の属性をもとに宮古のグスク時代の建物跡を整理していきたい。

竪穴住居は、宮国元島遺跡、住屋遺跡(1981)、住屋遺跡(俗称・尻間)、住屋遺跡(1999)、尻川遺跡より総計7基報告されている。これらの竪穴住居の年代については、住屋遺跡(1999)の竪穴住居が14世紀代をしめしているものの、その他の竪穴住居は、15世紀前半まで下る

ようである。このような各遺跡からの出土状況を踏まえると、宮古のグスク時代の15世紀前半までは、竪穴住居が用いられていたということができる。このような状況は、沖縄諸島や八重山諸島にはみられない宮古のグスク時代の建物跡のもつ特徴であるといえる。竪穴住居の形態的には、住屋遺跡(俗称・尻間)の第1号竪穴住居跡、住屋遺跡(1991)の竪穴住居、住屋遺跡(1981年)の竪穴住居は、調査区間の距離がすこしあるものの、同一遺跡で調査地が隣接しているということも、隅丸方形で、竪穴の上端沿いに柱穴をもち、屋内炉が検出され、階段をつくる点で、共通性の高い竪穴住居の一群であると考えられる。宮国元島遺跡の竪穴住居にはみられない点を考慮するなら、現在の市街地一帯で14～15世紀に用いられていた住居形態である可能性が高い。

掘立柱建物跡は、総計12基報告されている。竪穴住居同様に、現在の市街地一帯での検出事例が多い。住屋遺跡(俗称・尻間)で検出されている掘立柱建物跡の柱穴の構造は、3基とも共通しており、8本柱の構造をもっている。また、住屋遺跡(1991)では、中柱を有する9本の方形プランの建物跡が検出されている。しかし、これらの建物跡は、8本柱のタイプが平均的に3.3×3.5m、9本柱のタイプが3.0×3.0mであり、建物跡の規模としては小さい。このような小規模な建物プランとして6本柱の事例も住屋遺跡でみられる。また、ミヌズマ遺跡では、このような6本柱の建物が主体をなすという点で非常に特徴的である。沖縄本島におけるグスク時代初期の建物の構成として「吹出原型建物跡」が提唱されている(仲宗根 2004年)。この「吹出原型建物跡」においても、6～9本の小型の建物群が複数検出されるが、母屋(主屋)と呼ばれる大型の建物跡とセット関係にある。この点において、宮古では大型建物の報告事例は見られないことから沖縄本島の様相が異なる建物の構成をもっているといえる。八重山諸島の同時期の建物跡の事例としては、カイジ浜貝塚、ビロースク遺跡、新里村東遺跡などがみられるが、これらの建物跡の様相とも状況は異なっている。このことからすると、出土遺物の点では同一文化圏を形成するにいたった沖縄、宮古、八重山の3つの地域でも、生活様式を示す一つの建物の構造という点では、相違点が多いということができる。

3．まとめ

人が生活していく上で構成される集落には、今回対象とした住居以外にも、墓地、耕作地などの複合的な要素によって成り立っていく。その集落跡における住居跡の空間的位置づけは、当時の社会状況を考える上で重要な意味を有する。しかしながら、集落内における住居空間の利用を考えるあたり、一定の調査面積を有しない限りその集落の全体像は見えてことない。また、一定の空間を把握しても、その他の土地で全く異なる空間利用が行われている

可能性は否めない。このような前提状況が科せられるものの、今現在の調査成果が示す住居空間の利用はどのようなものである整理してみたい。

まず、前述した一定の調査面積を有する宮古のグスク時代の遺跡として該当するのは、住屋遺跡とミヌズマ遺跡の遺跡にのみ限られる。また、ミヌズマ遺跡については、現段階では、調査速報として報告された資料を取り扱うことを事前に断らなければならない。

住屋遺跡は、総調査面積3,300㎡である。この中で、まず、竪穴住居が検出されたのは僅かに1基である。同じように竪穴住居が検出された尻川遺跡については、調査面積430㎡で1基であるように検出される数は、比較的少ないように感じる。検出される掘立柱の数も比較的少ない。住屋遺跡では、平地式住居②にみられるような切り合い関係も2例みられるが、一定の範囲に建物が集中しているような状況ではないといえる。しかし、集落全体の様相が把握されているわけではないため、この点については留意しなければならない。住屋遺跡では、このような建物以外にも、炉跡や土坑墓などの集落を構成する遺構が複数検出されている。この中で注視したいのは、18基という非常に多くの土壙墓が建物跡と関連して検出されている点にある。この土坑墓の位置関係については、拙稿でも取り上げたように、一定の空間にまとまって検出され、墓域を形成していると考える（久貝 2010)。しかし、この墓域から漏れる事例も数例認められる。この数例の位置関係をみると建物に隣接した事例もみられる。第2号土坑墓と第8・9号石棺墓がその例にあてはまる。

一方で、ミヌズマ遺跡でも建物跡に隣接して土壙墓が検出される事例が3例確認されている。いずれも6本柱の建物跡に近接して土壙墓がみつかっている。しかし、この3つの事例については、建物と墓との時間軸の検討が不十分である。いずれの土坑墓からも、共伴遺物がえられておらず、人骨の年代測定からその年代を特定する方法しか残されていない。この点については、前述した住屋遺跡(1999)も同様であり、時間軸の考察が不十分であるといえる。これらの点については、今後の年代測定値の結果なども参照して追考していきたいと考えるところである。

平成24年度から発掘調査の開始されたミヌズマ遺跡では、これまでの宮古のグスク時代には見られない多くの発見があった。その中でもグスク時代の初期にあたる11～12世紀の段階から6本柱の建物跡が構築されていることが確認されたことは、従来の宮古の集落観を変貌させたといっても過言ではないといえる。同じグスク時代にあっても地域差や、集落を構成する集団の違いなど様々な推論を行うことができるが、この点については、出土遺物の整理を進めていきたいと考える。

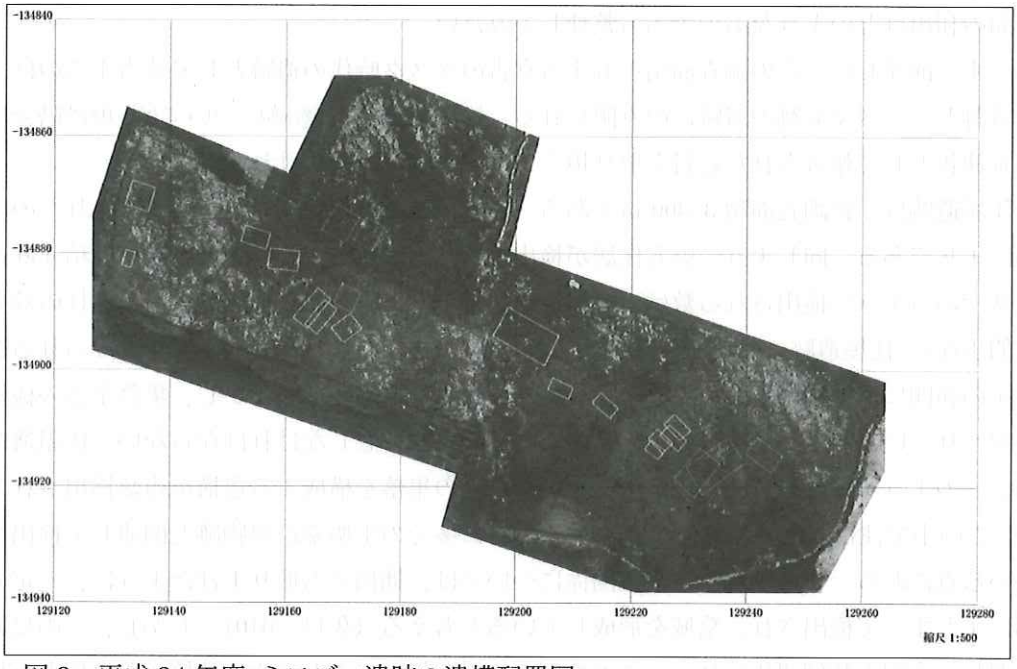


図２　平成 24 年度 ミヌズマ遺跡の遺構配置図

＜参考文献＞

・上野村教育委員会 1980 年 『宮国元島- 宮国元島遺跡調査報告-』

・江坂輝彌ほか編 2005 年 『新日本考古学小辞典』 (株)ニューサイエンス社

・仲宗根求 2004 年 「グスク時代開始期の掘立柱建物跡についての一考察」『グスク文化を考える』 新人物往来社

・久貝弥嗣 2010 年 「宮古・八重山諸島における 12～16 世紀の埋葬遺構集成」『宮古研究』第 11 号 宮古郷土史研究会

・久貝弥嗣 2014 年 「琉球史の南北―宮古・八重山の遺跡から見た琉球―」『琉球 交叉する歴史と文化』 勉誠社出版

・平良市教育委員会 1983 年 『住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告』

・平良市教育委員会 1999 年 『住屋遺跡(Ⅰ)』 平良市埋蔵文化財調査報告書第 4 集

・平良市教育委員会 2003 年 『尻川遺跡』 平良市埋蔵文化財調査報告書第 5 集

・宮城弘樹 2006 年 「グスク時代の建物跡の分類」『廣友会誌』第 2 号 廣友会

・宮城弘樹 2007 年 「沖縄諸島におけるグスク時代建物跡の変遷について」『南島考古』№26 沖縄考古学会